

新潮文庫

土と兵隊・麥と兵隊

火野葦平著



新潮社

と兵隊・麥と兵隊

定 價 100 圓

新潮文庫草8B

昭和二十八年一月十五日發行
昭和四十四年六月十五日二十刷

著 者 火 野 葦 平

發行者 佐 藤 亮 一

發行所 株式會社 新 潮 社

郵便番號 一六二
東京都新宿區矢來町七一
電話東京(〇三)(二六〇)一一一
振替東京 八〇八番

亂丁、落丁のものは本社又はお買求めの書店にてお取替へいたします。

⊕ 印刷・光邦印刷株式會社

© Ryôko Tamai 1953

製本・大進堂製本所

Printed in Japan

新潮文庫

土と兵隊・麥と兵隊

火野葦平著



目次

土と兵隊……………七

麥と兵隊……………九

解説 河盛好藏

土と兵隊・麥と兵隊

土 と 兵 隊

杭州灣敵前上陸記

(弟へ。十月二十日。太平丸にて)

その後みんな變りなく達者であることと思ふ。兄さんも元氣である。

今日も私達のまはりに、^{べうべう}森々と青い空と、^{べうべう}森々と青い海とがある。それは昨日も、一昨日も、一昨日も、一昨々昨日も、あつたと變らぬ青さで、そこにある。深々と秋の氣配を清々しくは思ふけれども、我々兵隊はもう少々退屈して居るのだ。私達が皆に見送られて門司の港を離れてから、今日で十一日になる。何とも名狀し難い別離の感情を強ひても笑ひに紛らして棧橋を離れたが、今も尙眼にちらついて去らぬ旗の波と、その波の中に浮き上つてゐた皆の顔と心とを、この頃では、妙にぼんやりした倦怠の中に思ひ出して居る。此處から見ると、あくまでも深い空の青さと海の青さとに挟まれて、島の上に茶褐色に連るあまり高くない山々と、松林と、白絹の帶をのべたやうな美しい海岸線と、白砂の汀と波とが見えるが、それは、我々が意氣込んで待った敵國の風景ではない。

兵隊を満載した御用船が次第にくらくなる夕闇の中を、ちらちらと明滅する燈火を兩岸に見ながら、關門海峡から六連列島の間に入りこんで行く時は、げにも通俗小説のごとき感傷的な瞬間であつた。兵隊達は皆上甲板に鈴なりにむらがつて、ものも云はず、次第に遠ざかつて行く故國の港を、無論涙をためて眺めながら、誰に向つてともなく、もうすつかり見えなくなつた人々に對してではなく、遠ざかつてゆく故國の山河に向つてであつたが、既に力の抜けた手振りや日の丸の旗を振りながら、いつまでも甲板から降りようとはしなかつた。それは、云ふまでもなく、我々兵隊が、

常にいかなる軍歌よりも愛誦して來た「戦友」の歌の、御國が見えなくなつてゆく、惻々たる感懷がお互の胸を深くつつんでゐたのである。しかしながら、秋の海の上を敵國へ向つて進航して行く我々の御用船の甲板からはいつまで経つても御國は見えなくならず、最後には反對にいつまでも御國が視野にあることが切なく齒痒ゆくなつて來た我々の氣持を外に、玄海灘の美しい海岸線に沿ひ、我々の船は又も何處とも知れぬ日本の灣の中に錨を下してしまつた。そして、屹度、今頃は戦場にあつて、彈丸の中で奮戦してゐるに違ひないと考へてゐるであらう君達を初め、故郷のことごとくの人々の意表にあつて、我々勇壯なる兵隊は何もせず、船の中で毎日ごろごろと起き伏して、退屈し、この頃では少々くさつてゐるのである。

私の乗つてゐる大平丸には二千人に近い兵隊が居る。それから二百に近い馬が居る。無論多くの兵器もある。その他戦争に必要な色々なものがある。海に浮いた動かぬ兵營の中では明けても暮れても戦争をしない兵隊がごろごろし、伸びる髭の寸法を計つてみたり、欠伸をしたり、洗濯をしたり、酒を飲んだり、手紙を書いたり、浪花節をうなつたり、腕角力をしたり、將棋をさしたり、トランプをしたり、雑談をしたり、飯を食つたり、小便をしたり、何もしなかつたり、してゐる。青い海の上にかういふ兵營が私達の周圍に何十隻となく浮び、向うでも同じことを毎日繰りかへしてゐるのが此方からよく見える。さうしてこれら多くの城は數隻の巡洋艦と驅逐艦とによつて周圍を取りまかれ、護衛されて居る。

我々の兵營は頭が凹へるやうに低くて狭い。中甲板の中に粗惡な材木で屋臺を作り、板の上に蔦蔭が敷いてある。中を仕切つて二階にしてあるのだが、立つて恰度いっぱい位の高さを二つに區切つてあるのだから、坐つてゐるのがやつとである。最初のうちはうっかり立上つて天井に頭をぶつ

つけたことも屢々であつた。私はその二階に居るのだが、最初乗船した時に、清水隊第一小隊はこの上だと云はれ、見ると狭くて低くて暗いので、間違ひだらうかと思つたが、云はれた場所に上りこんで見ると、どうやら一杯に入れることは入れた。背囊を並べて各分隊の境界にして、さて寝たところはまるで魚籠^{びく}に鰯でも並べた通りである。その不自由な狭さに少し馴れると、今度は暑いのに閉口した。中に居ると、むんむんとむせ返り、身體中が浮いたやうに汗に濡れて来る。いよいよ敵國の港に上るまで僅か數日の辛抱だからと思つてゐたが、既に十日を越しても我々はまだ何日この窄のやうな兵營に居なくてはならないのか見當もつかないのだ。いつたい我々は何處に行くのかも少しも判らないのだ。我々が九月に召集を受けて部隊の編成が終つた時には、なんとことごとく、兵隊が相當の親父ばかりであることに駭いた。つまり、既に一家をかまへ、妻を持ち、子供も何人かあるやうな兵隊ばかりであつた。殊に我々の中隊長はシベリヤ出兵の勇將だといふことだつたが、既に五十の坂を越し、頭には相當の白髪が見られた。さうして編成が終つても、我々の部隊は二十何日も小倉に止まつて出發する様子もなく、いよいよ乗船して出帆すると、思ひがけなく、日本の灣の中に碇泊して、又も出發する様子がない。この部隊は大連に上陸して、奉天か遼陽の駐屯常設部隊となるのだ、と誰かが云ひ出した。さうではない、上海に上陸するのだ、いや、もう上海には兵力はあり餘つてゐるから必要でない、滿ソ國境かも知れない、いや、ひよつとすると海州あたりに敵前上陸するのもかも知れない、或ひは廣東に行くのではないか、などと、色々な噂や風説が我々の間に擴がり、然もそれらを眞劍に兵隊達は語り合つた。それは眞劍に語るのが當然である。我々は何處でもよいやうな旅行に行くのではない。我々のさういふ取りとめのない談義の中には、我々の生命についての想念が常につきまとひ、不安の感情がその底を流れてゐたのだ。もとより殉國の

志を以て、既に愛する我々の祖國のために一身を投げ出して居る。我々は命を惜しみはしないが、だからと云つて我々小さい人間は、神のごとく、或ひは鬼のごとく、我々の生命を輕々と棄て去ることに對し、今すぐに平然となり得るごとくに鍛鍊されてゐない。我々の間では、いかにしても判らないことをなんとかして判りたいために、毎日無駄な檢討が續けられて居る。そして、それらの尤もらしい解説はどれも皆に満足と與へることが出來ず、日を重ねるにつれて、その不安の度を増大して行くのである。我々は嚴しい軍紀と戒律の下にある。我々の現在は唯我々が知つてゐるばかりである。軍機を守るために我々は全く通信を禁じられて居る。それは當然のことである。我々はどこにも手紙を出すことは出來ない。兵隊はただ日記の中に自分の行動を書き止めてゐるばかりである。手紙を書いてゐる者も、その手紙がいつ禁を解かれて發送され、宛名の人の許に届くものやら知らない。無論、私が今書いてゐるこの手紙も、何時君の手許に届くものやら、何もわからない。また、果して出せるやうになるかならぬかすらもわからない。わからないけれども、兵隊は誰も日記をつけ、手紙を書いてゐる。それはまた明日にも解禁になるかも知れないといふ希望とともに、明日にも敵地に上陸して戦死するかも知れない、とも思ふからである。遺言狀のつもりで、當もない手紙をつくり、日記を録す。無論私もその氣持である。これから先どうなるのか、何にもわからないけれども、これから、兄さんは、出来るだけ、及ぶかぎりの時間を盗んで、どんどん通信を送るつもりである。我々は生れて初めて踏みこむ戦場といふものを、今、いかにしても想像することが出来ない。あらゆる知識と記憶とによつて思ひ描いてみようと思ふけれども、いかにしても頭の中に戦場の姿を組み立てることが出來ない。だから、今こそ、彈丸の來ない船の中で、ゆつくりと日記をつけ、手紙を書いてゐるけれども、一度戦場に身をおいた時に、さういふ餘裕が出来るかど

うか、何も判らない。だから、今、さういふ約束をすることは間違ひかも知れないけれど、そのつもりで居る。

何か始まつたやうだ。船艙の底で拍手の音がして居る。退屈まぎれに又演藝大會か何かやつてゐるに相違ない。普段は兵隊はいつでも朗らかで快活でなかなか愉快である。又、兵隊の中にはなかなか隅に置けないのが居る。隅どころか、本物も居る。兵隊は一番浪花節を喜ぶやうだ。浪花節は誰も一節や二節は唸らない者はない。しきりに拍手の音がしてゐるのは、多分、吉田隊に居る、わたしは大體新物讀みでございまして、と云ひながら一つしか知らない明治時代の探偵浪曲をやる桃中軒雪右衛門（自分でさう稱してゐる）の「紀尾井坂血のハンケチ」かなんかが始まつてゐるに違ひない。演藝大會の夜などは兄さんも時々演壇に飛び上る。部隊の將校なども一杯ひつかけては兵隊の前に現はれ、それぞれ御得意の何かやり始める。殊に我々の小隊長である劍道五段の山崎隆就少尉は「紺屋高尾」が十八番で、これは部隊中で有名になつてしまつた。それは或る晩酩酊の極、調子が外れ、遊女は、客に惚れたと、ゆひ、と一々區切つて呶鳴つた上に、語尾の、は、に、と、ひ、をびんと力を入れて刎ね上げた節廻しだつたのが非常にをかし、皆が大笑ひした。中隊長の清水大尉も演壇の傍に坐りこみ、自給自足だといふ手持の水筒に酒をつめたのから水筒の蓋に注いでちびりちびりやりながら、にこにここと聞いて居た。これらの風景は實に和氣霽々たるものである。普通兵營では少々堅苦しく感ぜられる、上官と兵隊との間隔がここにはない。上官の熱演がをかしければ笑ひ、面白ければ半疊を入れ、拙ければひやかしたりするのが、いかにも自然である。それはもとより、言はず語らずのうちに、我々が一つの尊嚴なものによつて結ばれて居るからである。

自分はこの頃深く考へさせられることがある。私は第二分隊長である。さうして私の下に十三人の部下が居る。それはいつたいどういふことか。それらの人々は悉く昨日までは自分とは何の関係もない人達であつた。ただ同じ日本人であつたといふだけである。動員が發せられ、部隊が編成され、それらの人々は第二分隊長となり、私が第二分隊長となつた。それは唯部隊本部に於ける都合に依つてさう定められたに過ぎない。しかし、その單なる事務上の都合によつて決定された編成表が我々の手元に配布せられ、我々が點呼指名された通りに整列した時に、最も崇嚴なる確固不拔の關係がそこに生じた。私は生れて以來、かくのごとく嚴かな思惟の中におかれたことはない。ここに集つた兵隊は郷里では悉く相當の生活をし、仕事をし、力を持つて居た人々であるに違ひない者が、今、兵隊となり、第二分隊長となり、一步兵伍長である私の部下となつた。それは私などよりも遙かに高い人格の上に、私は分隊長となつた。これらの人々は自分の命令に従ひ、自分の號令に依つて動き、驚くべきことには、死の中へでも飛びこんでゆくのである。これはいつたいどういふことであらうか。我々の日常の凡庸なる生活の中に於ては、自分自身を自由にすらする事が出來ず、まして他人を自由にし、殊に死の中に進ませ得るものを一人としてすら所持することは至難のことである。私は今十三人の部下を得、これを命令によつて自由に水火の中に突進せしめ、死の中に投じ得る、と云はれたのである。さう聞かされた瞬間、私はあまりの事の重大さに、何か恐しく、愕然とするとともに、この瞬間を基點とする、私が嘗て想像もして居なかつた、従つて用意もしてゐなかつた、一つの新しい生活の方法が、倏忽として身内に自覺されたのである。私達分隊長は又小隊長とさういふ關係にあり、小隊長は又中隊長と同じ關係に、中隊長は大隊長と、大隊長は、——次々に擴大されてゆくこの關係は私には人間として思惟も及ばないほど偉大なことであると考へら

れ、その高く大きなものは私の想念からはみ出してしまふほどなので、私は眼前の感想をしつかりと胸に抱き、この新しい生活の前進を注意深く生きることに関心したのである。しかも、私がかくも思惟したことは、更めて誰も考へてみようとしなほ、實に單純極まることであつて、それ故に私は尙もその單純さに駭かされたのである。

戸 成 秀 雄

内 藤 豊 次 郎

吉 田 敏 男

末 永 助 一

中 川 日 由

高 橋 芳 信

早 瀬 光 雄

古 城 健 次 郎

湊 勘 市

田 村 春 夫

白 橋 常 雄

甲 斐 實

坂 上 利 雄

これが私の兵隊である、といふ風に云ふことを皆許してくれるだらうか。どれを見ても相當の面構へで、相當の男ならぬはない。私はこれらの兵隊と俱に、戰場を馳驅することが何かしら楽しみ

なのである。

飯を知らせる鐘が鳴つてゐるやうである。ここから見える青い海の上の兵營のどれからも鳴りだした。飯は船尾の炊事場に引換札を持つて取りに行くのだ。炊事は船員がやつてくれる。茶も沸かしてくれる。何しろ二千人もの大世帯だから大變なものである。食器は各自に渡つてゐる。分隊で二人位宛食事當番を定めておいて、炊事場から食事を取つて來、すむと、又、その食器や飯バケツやブリキの副食物入をタンクの水で洗つて返しに行くのだ。島の右手に少し高い山があつて、その眞上に沈みかかつた太陽がある。夕陽といふと、兵隊はすぐ赤い夕陽の戦場を思ひ出すが、毎日の感傷は、必ず、この夕陽を故郷でも眺めながら、今頃は出征したあの子は、或ひはあの人、或はとうちやんは、何處の戦地でこの夕陽を眺めながら故郷のことを思ひだしてゐるであらうか、と——どうもかういふ仕方もない感傷といふものは、古往今來、東西を通じて變らないものであるのか、よい親父どもが夕方になると妙にしんみりなつてみたりして、をかしい見たいである。あまり遠くもない日本の灣の上で、今ごろは、もないだらう。なんにもしないで船の上にごろごろしてゐるの、腹工合がどうもはつきりせず、腹が減つてゐるのやら減つてゐないやらわからないが、今日は斥候が晝間から炊事場の偵察に行つて、珍らしく夕飯は焼き鯛といふ報告があつたから、降りて行つてそれを肴に一杯皆とやることにしよう。兄さんも、どういふのか、この頃、酒をのむやうになつた。理窟つばい手紙で取りとめもなかつた。又、書かう。

(弟へ。十月二十八日。大平丸にて)